

情報リテラシーが要求される演習の効果的実施を補佐するための 対面講習と e ラーニング教材

Face-to-face workshop and e-learning materials for supporting the effective
implementation of an exercise lesson that requires information literacy

八尋 芙美子 喜多 敏博 合田 美子 都竹 茂樹
Fumiko YAHIRO Toshihiro KITA Yoshiko GODA Shigeki TSUZUKU

熊本大学大学院社会文化研究科教授システム学専攻

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし>本研究では、大学図書館において、情報リテラシーが必要とされる演習型授業の授業計画にあわせた対面講習と e ラーニング教材を開発し、授業実践を行った。その結果、教員からのコメント、受講者アンケートで好意的な結果が得られた。

<キーワード>情報リテラシー、教材開発、授業支援、授業実践、e ラーニング

1. はじめに

情報の信頼性を踏まえた上で、情報の取捨選択ができる情報リテラシーの能力が現代では求められている。大学では、図書館がその部分の講習を担当していることが少なくない。

著者の勤務する A 大学の法学部では、初年次の演習型授業において、あるテーマについて自分の問題として取り組む姿勢を身につけるために、ディベートを行っている。図書館では、法学部の依頼を受け、ディベートの主張を裏付ける論拠のはっきりした情報（文献）を探せるようになるための対面講習を毎年実施している。しかし、対面型では時間、場所、担当者等の物理的制約が発生する。そのため、全クラスに対して、必ずしも必要なタイミングで講習ができているとは言えず、学生の理解度の差も大きいのが課題である。

本報告では、改善策の検討のために法学部のクラスにおいて対面講習と e ラーニング教材を合わせて提供した実践について報告する。

2. 教材の設計と開発

2.1. 教材の設計

2.1.1. 対象クラスと前提条件

対象は協力を得られた法学部 1 年生 2 クラス (52 名) である。

対象授業は 2015 年 4 月から 7 月に実施された。授業計画は表 1 のとおりである。ディベートが始まる前に「図書館利用説明会」として、情報

検索方法についての対面講習(1 回 90 分)を図書館職員が担当する。この授業には同じ学部の上級生がチューデント・アシスタント(以下、SA とする)として 4 名ずつ授業中に教員の補助として、クラス内の担当グループのサポートをする。

表 1 授業計画

回	内 容
1	ガイダンス、説明・対話力 UP 講座①
2	説明・対話力 UP 講座②
3	説明・対話力 UP 講座③、ディベート入門
4	図書館利用説明会(対面講習)
5	ディベート合同説明会(全クラス合同)
6	第 1 ディベート：リハーサル
7	第 1 ディベート：試合
8	第 2 ディベート：リハーサル①
9	第 2 ディベート：リハーサル②
10	第 2 ディベート：試合 1 日目
11	第 2 ディベート：試合 2 日目、大会出場者の投票
12	第 3 ディベート：資料集めと戦略会議
13	第 3 ディベート：試合
14	合同ディベート大会(クラス対抗)
15	授業のまとめ、振り返りスピーチ

2.1.2. 学習目標

対象クラスを担当している教員と話し合い、情報検索部分の目標は「論拠のはっきりした資料を探せるようになる。ただし、資料を正確に調べられる能力(読み取る力)までは達しなくてよい」とした。

2.1.3. 対面講習と e ラーニング教材の設計

授業計画から、対面講習前後の受講生の活動を考慮に入れ、講習では前半をディベートへの動機づけ、後半に情報検索方法の紹介と理解度を確認するための練習問題(グループワーク)を

行うこととした。

前半では、SAによる裏付けの取れた資料を使ったディベートをよい例として実演し、1年生に自分達のその段階でのディベートと比較をさせることで、情報検索の必要性を動機づけた。後半では、情報検索方法を、新たに作成した手順説明のスライドと検索用ツール(データベース)のアクセス方法と利用方法をまとめた教材を使って紹介し、その理解度を確認するための(グループワーク)を行った。これらの教材は、対面講習後に参照できるように Moodle 上に設置した。

2.2. 教材の開発

前半については、図書館職員が SA と一緒にディベートのテーマについて、裏付けの取れた資料を使った主張と理由をポイントに台本を作成した。

後半については、紹介する検索用ツールの種類と数が多いため、資料別(例:新聞記事、雑誌論文、統計等)に、直接リンクと内容説明、マニュアルを表にまとめて一覧できるようにし、Moodle 上のコースにページとして設置した。

3. 実践内容

3.1. 対面講習とその後のフォロー

対面講習の実践内容は表2のとおりである。

表2 対面講習の内容

ミニ・ディベートの作戦会議
ミニ・ディベート(グループごと) [A]
SAによる模擬ディベート[B]
ミニ・ディベートの振り返り(AとBの比較)
情報検索方法の説明
練習問題(グループワーク)
まとめ

情報検索方法の後の練習問題では、グループごとに学生自身が、検索した結果を回答として Moodle コース上のフォーラムに投稿し、後日、図書館職員が個別にフィードバックを返した。また、この授業ではディベートの試合を行う前日までに参照文献リストをレジュメとして提出する課題が出されている。その内容を、授業時間外の SA である「図書館 SA」と図書館職員が協力して毎回、教員の指定する合格ラインを満たしているかどうか、フィードバックを行った。

3.2 評価方法

Moodle コースに掲載した教材のログ解析(対面講習後の利用頻度を確認)、教員へのインタビュー、事後アンケートを実施し、その結果を比較検証した。

4. 結果と考察

4.1. 結果

4.1.1. 教材のログ解析

用意した e ラーニング教材の対面講習後の活動ログを解析した結果、52人中36人(約69%)が利用していた。また、クラス対抗のディベート大会への出場者投票の結果を分析したところ、選出された33人中25人(約76%)が教材利用者だった。

4.1.2. 教員へのインタビュー

教員からは、昨年までの実践と比較して次のようなコメントをもらった。

- ・雑誌論文の引用率が上がり、論文中の統計等を使った議論も大幅に増えた。
- ・情報検索の能力が上がり、参照する資料が同レベルになったため、対戦する班の主張の予測ができ、かみあった議論が見られるようになった。
- ・「自分たちが必要性を感じて、自分たちの手で情報(文献)を集めてくる」ことへの意識が高まった。

4.1.3. 受講生への事後アンケート

52名中44名から回答が得られた。対面講習後に教材をつかった学生の回答には、「根拠のある資料を集めることができる」「ネットで検索するより信頼できる情報だから」という記述が見られた。

4.2. 考察

評価結果から、今回の実践により、昨年までよりも、学習目標に近づくことができた学生の割合が増えたように見られる。より効果を上げるためには、ディベートでの学生の発言内容から情報検索が足りないと判断できる学生には、ログ解析データを参考に、授業時間中にも SA や教員から「教材を使って情報検索をした方がよい」と薦めてもらうことで、情報検索への動機づけを学生ごとに、より必要なタイミングで与えることが期待できる。

5. まとめ

対面講習と e ラーニング教材を授業計画に含ませて提供した。その結果、ディベート演習が効果的に実施できたことを示唆するアンケート結果等が得られた。より効果を上げるためには、授業時間中にも学生ごとに情報検索についてのフィードバックを行うことが期待されるため、今後はその部分の追加検討が必要である。